

# 『孤道』完結プロジェクト

毎日新聞社、毎日新聞出版、講談社、そして内田康夫財団がタッグを組んで一つのプロジェクトを立ち上げました。その名も『孤道』完結プロジェクト――。

## 内田康夫の“思い”を継ぐ原稿を募集

『孤道』は、毎日新聞夕刊で二〇一四年十二月に連載がスタートした浅見光彦シリーズ最新作です。開始から九ヶ月、著者・内田康夫が病に倒れ、二〇一五年八月十二日を最後に休載となりました。第二〇四回までに内田康夫が紡いだ物語は、原稿用紙にして五〇〇枚にもなります。『孤道』の執筆再開までは、まだしばらく時間がかかりそう……。そこで、生来アイデアマンである内田康夫は思いつきました。『孤道』の続きを才能ある誰かに書いてもらおう――。

このたび、その想いを受け、『孤道』完結プロジェクトを発足し、まずは未完のまま『孤道』を五月中旬に刊行。そしてお読みくださった方のなかで、内田康夫の“思い”を継いでくださる方の、完結編の原稿を募集致します。

★原稿募集の詳細は『孤道』(毎日新聞出版)巻末および特設サイトをご覧ください。

特設サイト <http://www.mainichi.co.jp/kodo/>



### 『孤道』あとがきより (一部抜粋)

『孤道』は毎日新聞の連載小説でしたが、中途のまま休載を余儀なくされた作品です。

心苦しくも休載に踏み切らざるを得なかったのは、僕の病気のためでした。

二〇一五年夏、僕は脳梗塞に倒れて、左半身にマヒが残りました。以降リハビリに励みましたが思うようにはいかず、現在のところ小説を書き続けることが難しくなりました。

(中略)でも、僕は、小説をあきらめたわけではありません。いずれは……と、強い思いは勿論残っております。『孤道』を発表したい、しかし今の僕にこの続きは……と思いついたのが、未だ世に出られずにいる才能ある方に完結させてもらうということでした。

思えば僕が作家デビューしたのも、思いがけないきっかけでした。一九八〇年、当時の仕事の営業用に自費出版した『死者の木霊』が、ひよんなことで評論家の目に止まったのでした。そういうこともあり、世に眠っている才能の後押しができれば……と。